

「いのち」を大切にすることをはぐくむ教育プログラムの開発
 — 道徳の時間における資料の工夫を通して —

西田 育世

「いのち」というものを、何か漠然とした「人ごと」のような感覚で受けとめている現状は、人間の本質である「いのち」と「いのち」が響き合う「関係性」の希薄さに一因があるのではないかと考える。

「他者」を「自分」に重ね合わせ、「自分のこと」として具体的にとらえることによって、「いのち」の存在を、一般化された抽象的なイメージではなく、確かに存在する「かけがえのないもの」として実感できるのではないかとと思われる。「他者」を「人ごと」感覚ではなく「自分のこと」としてとらえるために、道徳の内容項目を「関係性」をキーワードにしてとらえ直すことにした。そして、道徳の授業の中で、どのような展開や工夫をすれば、「いのち」の存在を「自分のこと」としてとらえることができるか、実践を通して考察することにした。

第1章 「いのちを大切にすること」とは

第1節 現代社会から見えてくるもの

今日ある文明社会は、物の本質を「数値化」という「目に見える」形で表し、その「機能」に「価値」を与えることで発展してきた。しかし、その反面、確かに存在するけれども、どこにあるのかわかりにくい「目に見えないもの」の存在感が、希薄になってきたのではないだろうか。その結果、「目には見えない」けれども、人間の本質である「いのち」の認識が「人ごと」のような感覚になってきているのではないかとと思われる。

「いのち」の重みを実感するためには、「自分」との深いかかわりの中で、「いのち」と向き合わなければならない。しかし、「自分」という存在を自覚するのは、「自分」の中に目を向けるのではなく、「他者」の存在を通してである。とすれば、まず、「他者」との「関係性」を深く意識しなければならないのではないかと考える。

第2節 「人ごと」を「自分のこと」に

下の図1は「人ごと」の感覚について、筆者の考えをまとめたものである。

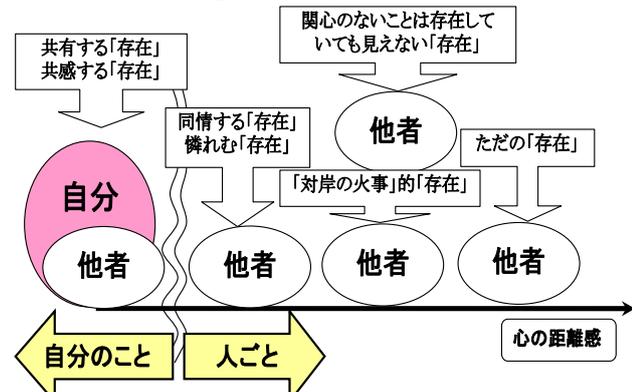


図1 「人ごと」という感覚

「他者」と「自分」との「心の距離感」の違いによって、「他者」の存在のあり方が変わってくることを示している。「他者」と「自分」との間に「心の距離感」があれば、その距離が短くても「人ごと」である。「他者」と「自分」が共に同じ位置にあるときに、初めて共感できる関係となるのである。「人ごと」の感覚のままでは、「他者のいのち」も「自分のいのち」も、「人ごと」としてしか受けとめられないのではないだろうか。「他者」の存在を「人ごと」ではなく、「自分のこと」としてとらえることによって、「自分」の存在を実感できるのではないだろうか。「自分のいのち」を「かけがえのないもの」ととらえるためには、同じ「かけがえのないいのち」を持つ「他者」を「人ごと」ではなく、「自分のこと」としてとらえることが大切であると考えられる。

第3節 「関係性」の中にある「いのち」

人間の肉体がなくなっても、その人と深いかかわりのある人にとっては「つながりのいのち」が存在する。「からだのいのち」が無くなっても、なお存在し続ける「いのち」があるということを含めた中で、「いのち」を語らなければならないと考える。生きものの本質としての「いのち」、「かけがえのないいのち」は「かけがえのない存在」として出会った「他者」と「かけがえのない存在」として認識した「自分」との間に、存在するのである。

「いのちを大切にすること」心は、「他者」との豊かな出会いの中ではぐくまれる。「かけがえのないいのち」を持った「他者」と出会い、お互いが響きあう中で、「かけがえのないいのち」を持った「自分」が生き生きと輝きを増すのである。

第2章 生き方に迫る道徳

第1節 「一人称のいのち」を生き生きと輝かせるために

中学校学習指導要領解説には、「道徳教育は、『人生いかに生きるべきか』という生き方の問題」と明記されている。道徳は、様々な生き方にふれ、それを「人ごと」ではなく、「自分のこと」としてとらえる中で、「道徳性」を養い「自分自身」を形成していく教育である。

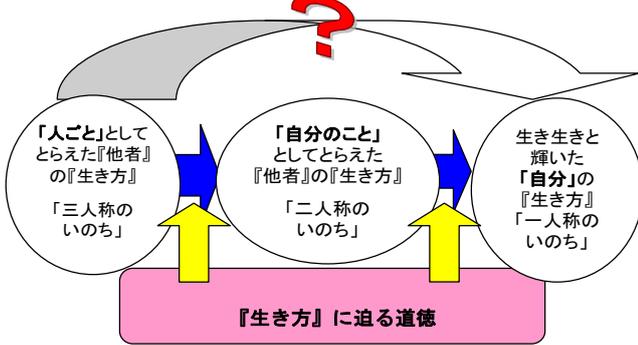


図2 「生き方」に迫る道徳 イメージ図

図2で示したように、「他者」の生き方を「人ごと」ではなく、「自分のこと」としてとらえなければ、自分自身の生き方につなげていくことはできないのではないかと考える。「自分」の存在、すなわち「一人称のいのち」が生き生きと輝くような、「自分」をとりまく「他者」との「関係性」を、道徳教育を通して、生徒も教師も共に築いていかなければならない。

第2節 「関係性」でとらえた「道徳」

「いのち」はかけがえのないもの、そして「他者」も「自分」もかけがえのない存在である。しかし、「かけがえのない他者」と「かけがえのない自分」がそれぞれ単独に存在しているのではない。「他者」と「自分」との「関係性」の中でお互いが「かけがえのない存在」となるのである。

この観点から考えると、道徳の内容項目を「いのち」を中心とした「関係性」の中でとらえることができるのではないかと考える。

第3節 「歌」を活用して

「他者」との「関係性」を深く築くための工夫として「歌」を活用した授業展開を考えた。

「歌」を活用する理由は、「共感」と「追体験」にある。中学生が好む歌には、同世代として「共感」するものがある。「共感」できるのは、作者が描いた生き方に「自分」を重ね合わせて聴いているからである。生徒にとって身近にある「歌

詞」をじっくりと味わうことで、「追体験」することができるのである。「歌詞」の中の「他者」の生き方を「自分のこと」としてとらえることによって、「自分」の生き方に迫ることができる。と考える。

また、「歌」は「自分」の成長とともに、生涯、繰り返し再生し、その時々で、自らをふり返らせる力を持っていると考える。

第3章 実践授業を通して

第1節 アンケートに見る生徒の意識

実践授業をするにあたり、生徒に「いのち」についての意識調査を行った。その結果、生徒は、「生きていく上で必要なもの」を問う項目でも、「生きていると実感するとき」を問う項目でも、家族や友達、学校といった「他者」との「つながり」を意識していることがわかった。そのような「他者」と「自分」との「関係性」を、実生活の中で深く意識させる中で、自己認識を深めていけるような授業展開が必要であると感じた。

第2節 「関係性」を意識した道徳の指導

「関係性」を意識した指導案を作るときポイント、「自分のこと」として考えることができるか、という点と、「他者」との「関係性」の中で「自分」の存在を意識することができるか、という点である。

『Best Friend』を使った授業での中心発問は、「相手にとって、自分がベストフレンドであるためにはどうあるべきだと思いますか」というものである。「自分にとって」という視点ではなく、「相手にとって」という視点で考える問いは、「他者」の心情に重点を置くことによって、「他者」に映る「自分」という存在が見えてくるのではないと思われる。「他者」を「自分のこと」として考えることを手がかりにして「自分」の行為を見つめることが、「いのちを大切にする心を育てる」ための基本ではないかと考える。

第3節 実践授業を終えて

「一人一人を徹底的に大切にする」ということをハンドベルの演奏に例えると、一人一人の持つハンドベルを確実に響かせることであり、その一音一音が正しい「関係性」の中で響き合ったとき、素晴らしい音楽が生まれるのではないだろうか。教師として、生徒との出会いが「かけがえのない出会い」となるように、生徒との確かな「関係性」を築くことが重要なのである。